
やらずの雨

侑真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やらずの雨

【Nコード】

N1872F

【作者名】

侑真

【あらすじ】

夏休み、バスに乗り祖母の家へ向おうとしていた少年は、不慮の事故に巻き込まれる。意識を取り戻した彼がいた場所は見たことのない場所で……。

ブローグ

空は真夏の暑さを残し、雲一つない快晴。
バスの窓から暑すぎる太陽光が差し込む。

外には山の木々が揺れ、川は穏やかに流れる。様々な野鳥も飛び、自然そのもので溢れているその景色は、人々の心を穏やかにさせる。木々は風に吹かれ、おおらかに、包み込むように揺れる。

そんな山道を行くバスはよく揺れる。

曲がりくねった道を上るため、左右にも振られる。

ガタガタと鳴るバスの一番後ろの席で、窓から外を眺める少年が一人。大きな荷物と土産が入っているらしい袋を持っている。

暑いのだろうか。少年は窓を押し上げ、外からの空気を入れようとした。

冷たい風が入り、少年の色素の薄い髪を撫で付ける。少年は、前髪が風に持っていかれるのをうつとうしそくに手で押さえた。

バスがカーブに差し掛かる。

ガタガタと揺れるバスの中、少年は眩しそうに目を細め、窓の外を眺めていた。

ガタガタガタガタ……

山に音が響き渡る。

少年が背もたれに寄り掛かる。

と、同時にバスに大きな衝撃が走った。

少年は驚いた表情で窓の枠に右手をかけた。

バスが左に傾く。

バスのブレーキ音が鼓膜を叩いた。

重力により少年の身体は左に大きく傾いた。

バスの中は混乱に陥り、叫び声に満ちる。

必死に窓に喰らいつくが、右手だけでは支えきれず、少年の指は虚しくも宙を掴む。

そのまま身体は反対側の窓まで持っていかれ、背中を強く打ちつけた。

少年の顔に苦痛の色がにじむ。

バスにさらなる衝撃が起こる。ガードレールを跨ぎ、突き進む音がする。

ブレーキの音。

運転手の声。

乗客の叫び。

瞬間、少年の身体がふわりと浮いた。

そしてまた衝撃が走る。

全身を強く打った少年は、回る世界を見ながら意識を手放した。

第1話

雨音が聴こえる。

木々のざわめきが聴こえる。

身体のあちこちに痛みが走り、意識がだんだんとはっきりしてきた。
「いつ……てえ……」

うつすらと目を開けると、ぼやけた視界に見慣れない光景が入ってきた。

天井には木目があり、部屋には襖ふすまと障子しょうじがある。

しかもご丁寧に、俺は布団の中にいるようだ。

「どこだよ、ここ……。」

こんな部屋、俺の家には無い。

「そつえば……。」

唐突に自分が事故にあったことを思い出した。バスがガードレールを乗り越えた衝撃や、身体が宙に浮く感覚が蘇る。背筋をヒヤリとしたものが走り、自然と身がすくむ。

それにしても、誰がここに連れてきたのだろうか。

服装もいつの間にか着物に変わっており、着てきた服は枕元に丁寧に畳まれていた。

身体はあちこちに擦り傷や切り傷があり、右足首には包帯が巻かれていた。脇腹は打撲したらしく、身を擦ると鈍い痛みに襲われる。とはいえ、あんなところから落ちて、よくこの程度の傷ですんだものだ。自分の強運に感謝するほかない。

ここの家主はどこに居るのだろう。礼を言わなければ……。

思いながら痛む身体に無理をさせ、ゆっくりと上半身を起こすと、廊下から足音が聞こえてきた。

足音がする方へと視線を向けると、この部屋の障子に影が映るのを見た。

すすす、と障子が静かに開けられ、その隙間から着物を着た男の姿が見えた。

背の高くすらりとしたその姿は、着物を綺麗に着こなし、その黒の長髪は儚さを思わせる。

綺麗な黒髪に端正な造りの顔は、男の俺から見ても見惚れるものがあった。

視線がかち合い、彼は目を細めて優しく微笑んだ。

月明かりのような輝きを持った髪がさらりと揺れる。

「起こしてしまいましたか。すみません。」

彼はお盆を持ちながら、布団のすぐそばで膝を折った。

お盆には薬草らしきものと包帯が乗っている。きっと今俺の身体の巻かれているものと同じものだろう。

「朔、と申します。森の中で貴方を見つけたときは驚きましたよ。」

言いながら髪を耳にかける仕草はやけに艶っぽく、俺は何故か気恥ずかしく、うつ向いて小さく頷くことしかできなかった。

「傷は痛みますか？」

スラッとした指が俺の胸元に伸びてきた。

「え？」

急な接近に驚き少し身構えると、彼は一瞬きょとんとし、悟ったように薄く笑った。

「包帯を変えるだけです。その手ではできないでしょう？」

俺の両手は傷だらけで包帯も巻かれ、ものに触るにはすこし難しそうだった。

「…あ。お、お願いします。」

身構えてしまった自分が恥ずかしく、不自然に視線を游がせてしまった。

着物の衿あわせの部分丁寧に開かれ、傷だらけの上半身があらわになった。

身体のおちこちに包帯が巻かれている。自分でみても痛々しいほどで、生きていたことを心底不思議に思う。

慣れた手付きで包帯をほどき、薬を塗るその指を眺めながら、すごいなあと関心してしまった。

素早く包帯の交換を終えると、朔は俺の着物を整えた。

「あ、有難うございます。」

ペコリと頭を下げると、どういたしましてと返される。

「あの、ほんと、助けてもらっちゃって。」

有難うございます、とまた頭を下げた。

「暫くは動くのも難しいだろうし、治るまで養生していつて下さいね。」

「あ、でも、家に連絡入れなきゃ……。電話借りても良いですか？」
おずおずと尋ねると、朔は困ったような表情になった。

「すみません。ここ、電話を繋げてないんです。」

申し訳なさそうに視線を落とす朔の顔を、俺は呆然と見つめた。

外に連絡することも出来ないということか？

流石にそれは困る。連絡も入れずに実家に帰らなければ、家族が慌てないはずがない。

まずいなあ、と途方に暮れていると、朔が紙を取り出した。

「手紙ではダメでしょうか。私が街に出たときに投函してきますから。」

なるほど、手紙か。着くまでにタイムラグが有るとはいえ、何もしないよりはマシだろう。

指が上手く動かない俺に代わって朔が筆をとる。口頭で伝えた文が、目を見張るほどの達筆ですらすらと紙面に興される。

「なんか、これじゃあ、俺からの手紙だって信じてくれなそうだ。」

お世辞にも上手いとは言えない自分の文字を思い浮かべる。雲泥の差だ。

そんなことを考えている間に、朔は宛名まで書き終えていた。

「差出人の名前は……。」

チラリとこちらを見る。

「あ……名前、言ってますよね？……すみません。高橋直也って

言います。」

散々世話になっておきながら、自分の名前すら伝えていなかったなんて。

失礼にもほどがあると軽く自己嫌悪に陥った。

「直也君ね。覚えましたよ。」

漢字の説明を聞いて、朔が俺の名前を書く。達筆に書かれた俺の名前を見て、いつもと違う印象を受けた。

第2話

「では、これは預かっておきましょう。」

丁寧に封をした手紙をお盆の端に乗せる。

早めに届くと良いんだけど…。なんせ山の中だ。暫く時間が掛かってしまいかねない。

「さて。」

俺の不安を断ち切るように、朔が明るい声を上げた。

「夕食にしましょう。そろそろお腹もすくでしょう?」

微笑みかけられ、そう言われてみれば…と、意識した途端にお腹の虫がきゆるきゆると言った。

その音を聞いて朔はクスクスと笑い、俺は恥ずかしさで罰の悪い笑みを浮かべた。

その日の夕食は山菜と川魚を中心に使って作られた純和食だった。

「すげえ、うまい! 凄いね、朔さん。」

スプーンでご飯を掻き込みながら、朔の手料理を褒めた。

お世辞ではなく本当に美味しかったのだ。

一人暮らしを始めてからはジャンクフードを食べる機会が多く、なかなか料理なんてしなかった。久々に食べる和食は実家を彷彿とさせる懐かしい味だった。

明らかにマナー違反の食べ方をする俺を見ながら、朔はどこか楽しそうに微笑んでいた。

「…朔さん、ここに一人暮らしなの?」

ふと疑問が頭をよぎり訊ねた。今いる食卓にも自分達以外はいないし、部屋を移動するさいにも誰にも会わなかった。一人暮らしには少し大きすぎる長屋。ここに一人で暮らすのは寂しいような気がする。

「ええ、一人ですよ。」

「寂しくない？」

「…そうですね。たまに離れて暮らす兄たちが訪ねてきますから、そんなに寂しくはないですよ。それにね…。」

カタンと箸をお膳に乗せる。

「直也君のように、思いがけないお客様もいらっしやいますし。寂しくなんかないですよ。」

にっこりと微笑んだ朔は、嘘を言っているようには見えなかった。そして言外に、俺がここに居ることを許容してくれたことに、俺は内心ほっとしたのだった。

ご飯を食べながら俺と朔はとり止めもない話をした。とはいえ、殆ど俺が一方的に話してただけ。

身も知らずの人間よりは、情報が有ったほうがいいかなって思っただ。家族の話から、高校の話、部活の話に、好きなテレビの話。朔はこの山の中のでの生活が長いらしく、興味深そうに俺の話を聞いていた。テレビ番組を全然知らないのには驚いたけど、何となく彼らしいような気がした。

「あー、お腹いっぱいだ！」

たらふく食べて気持ちも満たされたようで、いつの間にか不安な気持ちは何処かに行ってしまった。今は悩むよりも怪我を治すことを優先しようと思える。朔には悪いが、しばらくは厄介になることに決めた。

「朔さん、申し訳ないんですが…、暫く泊めてもらっても良いですか？」

「もちろん大丈夫ですよ。それに初めからそのつもりでしたし。」
手際よく皿を片付けながら、朔は俺の期待通りの言葉を返してくれた。いい人に見つけてもらえて良かったと心底思う。怪我が治ったら何かお返しをしなくては……。

皿を片付け終わると、俺の願いを聞き入れて、朔は家の中を案内してくれた。そんなに広くもない長屋のため、捻挫をしてもある程度は一人で動けそうだった。

なるべく一人で動かないようにと忠告をされたが、必要以上に朔の手を煩わせるわけにはいかない。出来ることは少しでも自力でやらなければ。

貸してもらった部屋から廊下に出ると、窓から月明かりが差し込んでいた。いつの間にか雨は上がったらしい。しかし相変わらず包帯の巻かれた右足は鈍い痛みを訴えている。

天気みたいに簡単に良くなったりはしないか…。

どのくらいで完治するのか分からない。こっそりため息をついて、俺は部屋に戻った。

翌朝は良い天気だった。

朝食の味噌汁の良いにおいに誘われて目を覚ました俺を見つけた朔は、端正な顔を驚きのそれに变え、慌てたように駆け寄ってきた。瞬間、何故か懐かしい心持ちがした。遠い記憶の中で同じ光景を見たような気がする。

「歩いちゃダメですよ!」

肩を貸され、ご飯なら持つて行くからと告げられた。

気のせいかな…。

心に引っかけかりを覚えながらも素直に肩を借りると、朔は俺を部屋まで連れて行った。

随分丁寧に連れられたものだから、ものすごく過保護なような気がして俺は思わず苦笑してしまった。

「俺、大丈夫だよ?」

実際、昨日よりも足の腫れは引いたようだし、鈍痛も良くなってきているのだ。

「ダメです!直也君はすぐ無茶するんだから!」

朔はメツと子供にするように怒ってくる。俺、そんなに子供じゃないんだけどな…と思いつつ、言われるがまま布団に入りなおすと、それを見て朔は満足そうに微笑んだ。

そんな顔で笑われると俺は文句も言えなくなってしまふ。イケメ

ンって得だ。

部屋を出て行った朔を見送り、一人残された俺は何をすることもなしに廊下の窓から外を眺めていた。

この家は長屋なので、廊下を挟んだ部屋の反対側は前面窓になっている。夜は障子を閉めているようだが、昼間は開けっ放しのようだ。窓の外には広めの庭が広がっている。垣根によって敷地が区切られているが、垣根の外は当然のことながら木々しか見えない。朔さんしか住んでいないようなところで敷地を主張するかのような垣根に意味が有るのだろうか。

そんなことを考えながら外を見てみると、視界の端に朔さんが映った。視線を向けると不思議そうな顔をされた。

「何を熱心に見ていたんですか？」

「あ、垣根をね。わざわざ敷地を囲んでるのはなんでかなあって思っただんです。」

指を垣根の方へ向ける。指先を追うようにしてそちらに視線を向けた朔は、合点がいったような顔をした。

「人はいないんですけどね。動物たちがいるから、荒らされないようにしているんですよ。」

「あ、そっか。動物くらいいますよね。」

「直也君も元気になっても一人で敷地外に出たらダメですよ。何があるかわかりませんから。」

「了解です！」

敬礼のポーズで茶化したら、分かっているのになって苦笑されてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1872f/>

やらずの雨

2010年10月10日05時43分発行